

# 最新事情

## 大学編⑦

レンガ造りの泉ヶ丘キャンパス。2021年からは全学部生がこの地で学んでいる



キャンパス統合後、学生のための学習スペースを増設

社会で求められる対人スキルを身に付けることが、確かな自信になる

# 帝塚山学院大学

(大阪府堺市)

帝塚山学院大学では、学生が、社会や企業・組織、そこで働くことについての視野を広げられるよう、1年次からキャリア形成科目を実施。キャリアセンターでは2022年度から、資格取得支援の一つとして、秘書検定の受験を勧めている。社会で求められる対人スキルを身に付けられるだけでなく、仲間と共に学ぶ経験になり、成功体験にもつながるといのがその理由だ。同学のキャリア形成支援と秘書検定の取り組みについて伺った。

### キャリア形成科目や産学連携で学生の視野を広げる

帝塚山学院大学は2024年度に学部学科改編を行い、「リベラルアーツ学部 リベラル

アーツ学科」「総合心理学部総合心理学科」「食環境学部 食イノベーション学科」「食環境学部 管理栄養学科」の3学部4学科構成となった。閑静な住宅街にたたずむ美しいレンガ造りの校舎で、約1600人の学生が学んでいる。

4年間の学びを通じて、学生たちはそれぞれの進路を選択していく。一般企業から行政までの卒業後の就職先は多業種にわたっている。

「総合心理学部だから心理職」というわけで

もなく、その知識を生かして一般職を選択する学生も多いです。食環境学部でも、管理栄養士や栄養士の資格を取得した上で、製造や小売に進む学生もいます」と説明するのは、キャリアセンターの浜本智也課長だ。

同学には正課としてキャリア形成科目があり、そのうち「キャリアデザインⅠ・Ⅱ」（春学期・秋学期）は1年生の必修科目だ。ここでは、社会の中での企業や組織の役割、働くことの意味などとともに、就職先としての企業の選び方などについても触れる。府内を中心とした企業でのインターンシップは、事前学習や報告まで含むものは単位として認められる他、学部によっては産学連携による商品開発などの取り組みも増えてきている。4年間を通して、学生が何らかの形で社会に触れ、卒業後の生き方を考えられるようにし、それぞれの学習スタイルや目標に合わせてキャリア形成を行っている。

ただ、近年の学生の様子から、課題も感じていると浜本課長は語る。

「ここ数年は、特に学生の活動量の少なさが課題の一つになっています。就職活動でも、1社ずつしか受けなかったり、1社から内定が出たらそこで決めてしまったりする学生も少なくありません。しかしそれではミスマッチの懸念も大いにあります」。

よくも悪くも売り手市場。その点は学生にとってには有利だが、やはり大手企業、人気企業に応募が集中し、競争率は高い。学生の目に留

キャリアセンターの浜本智也課長。自身も帝塚山学院大学の卒業生であり、後輩たちの学びと挑戦を温かく見守っている。「本学は歴史ある大学ですから、大阪府内を中心に、OB・OGが活躍している企業も多数あります。そういった企業は本学を高く評価してくださっており、求人頂く機会も多いです」(浜本さん)



まりやすいのはB to Cの企業だが、企業分布でいえばB to Bが大半を占めており、学生は知らなくとも、よい企業は多々ある。しかし活動量が少ないと、そういった企業と出会うチャンスも減ってしまう。

「今はインターネット社会で気軽に情報が得られてしまう一方、本当にそれが正しい情報なのかどうか分かりにくくなっているという懸念もあります。学生一人一人が何を軸にするのか、何を優先するのかをよく考え、納得できる進路決定をしてもらいたいです。就職に関してはキャリアセンターが中心となって支援していくべきところ。視野を広げる機会になるような企業との取り組みを、今後さらに増やしていくことも検討中です」。

2025年度も、できるだけ早い時期から卒業後の道を視野に入れられるような仕組みづくりをしていると浜本課長。キャリアセンター主催の支援講座や学内の就職活動イベントには、1・2年生も参加できるようにした。

「就職が間近に迫ってから焦って選んだのでは結局、知っている会社しか選択肢に残らず、それは本人にとっても、企業にとってもよい結果になりません。早めの意識付けが必要だと考えています」。

## 秘書検定への取り組みを、学生の活動の一つに加えたい

キャリアセンターでは、2022年度から秘書検定を推進してきた。その背景にも、やはり学生の活動量の少なさへの心配があったと浜本課長は言う。

「コロナ禍で十分な学生生活を送ることができなかつたこともあり、面談で『アピールできることが何もない』と言う学生が増えてきました。それを受け、履歴書に書けるような取り組みをつくりたいと考えたのです。学生が自主的に集まって何かを成し得る機会になりますし、そこで一人一人がマナーの向上や資格取得といった目標に向き合うことで成功体験を生み出せたらと考え、取り組んできました。秘書検定は、ビジネスマナーを習得しながら、合格することで自己肯定感を高められるので、キャリアセンターとしても推奨しています」。

取り組みの開始以来、課外の資格取得支援講座内の秘書検定2級講座(4月開講)、同準1級講座(9月開講)には、学科や性別を問わず「何かに挑戦したい」「就職活動の第一歩にした」という学生が集まるといいます。2級・準1級共に、筆記試験対策はオンデマンドのビデオ教材で自分の都合に合わせて学ぶ形式だ。準1級面接試験については、数人のグループごとに、講師による対面講座が数回行われる。

総合心理学部心理学科4年生の鶴勝仁さん、

人間科学部(現食環境学部)食物栄養学科4年生の丹千明さんは、2年生だった2022年6月に秘書検定2級、11月に準1級に合格した。

鶴さんは、親しくしていた先輩に誘われ、一緒に秘書検定を受験することに。「競い合って勉強したのが、よい思い出です」と振り返る。

「初めて知ることばかりでしたね。特にビジネス文書の形式についてはあまりにもなじみがなく、そもそも丁寧な形式の整った形で送らなければならぬのだという認識すらなかったのが、驚きました。社内文書や社外文書などそれぞれに細かい形式があるのが、とても日本らしいなと思いました」(鶴さん)。

丹さんは、「学習塾の事務員のアルバイトとしており、目上の人と関わる機会が多かったこ



(左から)鶴勝仁さん、丹千明さん。3年次、鶴さんは企業インターンシップ、丹さんは保育園での臨地実習に参加。「スーツ姿で姿勢がよくないと格好悪いので、面接練習で教わったように、常に胸を張った姿勢を意識しました」(鶴さん)。「秘書検定で学んだ「今は何を優先して動けばよいか」を考える意識が役に立ちましたし、整った形式の礼状を出すことができました」(丹さん)



学内では、就職活動の支援のため、キャリアセンターが中心となってさまざまなセミナーを開講している

とから、正しい敬語や電話応対、メールの書き方などを学び、自信を持てるようになりたいと思いい秘書検定を学ぶことにしました」と話す。「2級・準1級への挑戦を通して、知識を得たことで堂々とできるようになったというのが一番の成果です。言葉遣いも応対も正しい仕方を知っていると自信が持てます。おかげで誰が相手でも迷いなく話せるようになりました」(丹さん)。

二人とも、準1級面接試験はとてもよい経験だったと口をそろえる。「面接の練習では、声の大きさ、話すスピード、手の所作や歩き方など、先生から全般的に指摘を受けました。改めて教わることででき、とてもありがたい機会だったと思います。接客のアルバイトもしているのですが、合格後は、お客さまから『所作がきれい』とお褒めの言葉をいただくことも。教わったことは日常生活でも生きています」(丹さん)。

鶴さんは練習も女子学生の中に男子一人で、

不安ばかりだったが、試験本番の緊張感は忘れられないと話す。

「文章の内容を上司に報告する課題が出ますが、控室で覚え、移動しながら頭の中で整理して、姿勢や声、言葉、動作にも注意を払いながらロールプレイングしなければなりません。正直に言っ、あれほど緊張する場は他にないと思います。就職活動では本命だった公務員試験で東京まで面接に行きましたが、有名大学の学生に囲まれても穏やかな気持ちで臨めました。準1級面接試験で、メンタル面が鍛えられたおかげです」(鶴さん)。

### 秘書検定の学びを一ステップに実践で知識とスキルを磨く

学生に推奨するために、キャリアセンターでは浜本課長含め職員2人も、2022年度に秘書検定を受験した。浜本課長は2級と準1級に合格。学生と同じスケジュールで講座も一緒に受けたと話す。通勤時間にオンデマンド教材(動画)を見て勉強し、対面の準1級面接試験対策講座にも、女子学生に混じって参加。推進する側として、「絶対合格しよう」と、強い気持ちで受験したと言う。

「正しい振る舞い方を改めて学び直す機会になりましたね。日々仕事をしていますが、細かい所作などには自信がなかったので、実際に仕事をする際に思った以上に生かれています。私はキャリアセンターに配属になって4年目で

すが、以前の部署とは違い、ここでは企業の方と電話やメールでやりとりをすることが多いのです。秘書検定で知識を得たことで、対外的な場面でのマナーに自信が持てるようになりました」(浜本課長)。

秘書検定を推進してきたこの4年で、浜本課長は意外な効果も感じている。

「講座を受けた学生の多くが、試験に向けての自己管理や計画性までも身に付けているようです。また、合格後、『さらに次の資格を』という学生も増えてきました。秘書検定がちょうどよい助走になっているのだと思います」。

学生には、できるだけ以外の社会を意識し、視野を広げてもらいたい。そのためのキャリアセンターの支援はしっかりと実を結んでいる。

学生の二人は、この春から社会人だ。鶴さんは出身地石川県の県庁職員として、丹さんは保育園で栄養士として新生活が始まる。

「公務員ですから、上下関係も意識しないといけないと思いますし、最初こそ円滑なコミュニケーションをしっかりと意識したいと思っています。今後磨いていきたいのは、行動での気遣い。さり気なく気遣いができるようになって、人としての魅力上げていきたいです」(鶴さん)。

「就職後はお子さんや保護者の方だけでなく、園の保育士さんなど、さまざまな人と関わることになりました。丁寧だけでなく、しっかりと正しい言葉遣いで、感じがよいと思ってもらえる話し方を磨いていきたいです」(丹さん)。